

大学名 愛媛大学

第69号 特集テーマ「国立大学のこれから」

表題 『おぎゃーの図』の具現化を目指して！

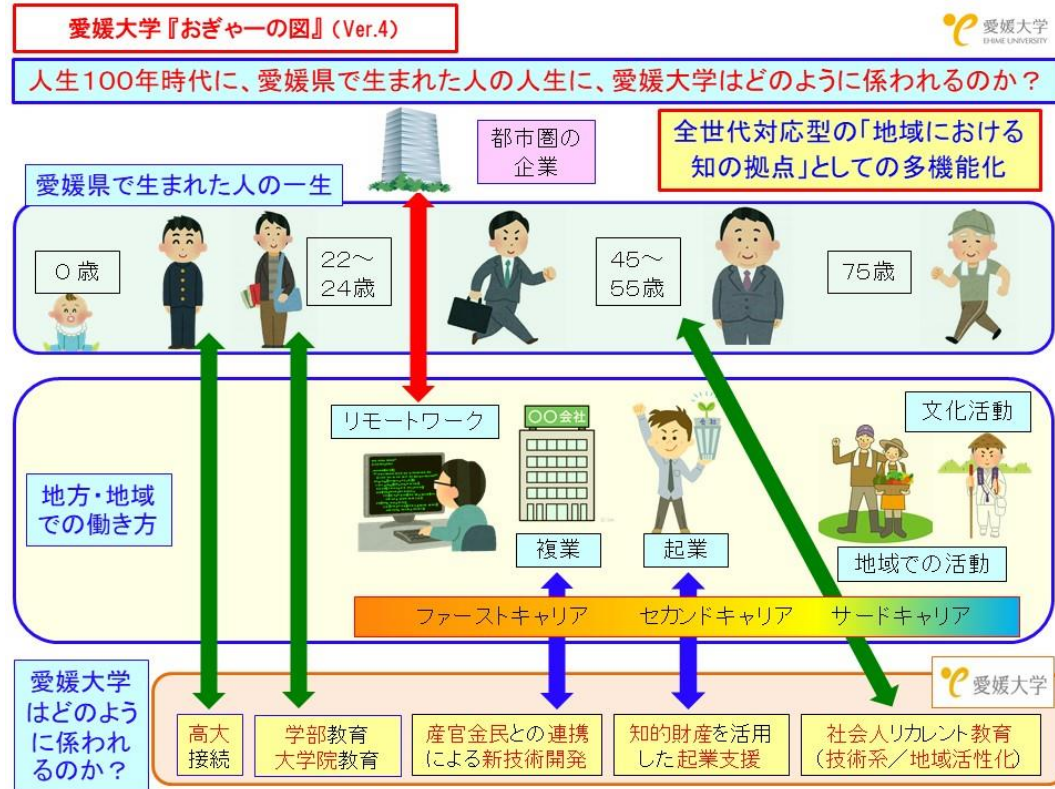
特色ある取組の趣旨

「これからの大学には、どのような機能が求められるか？」ということ、愛媛県で「おぎゃー」と言って生まれた赤ちゃん、その人の一生、生まれてから亡くなるまでの100年くらいの人生に、大学はどのように係わるかという視点から考え直してみたのが、『おぎゃーの図』です。現在の仁科学長が、社会連携担当理事であった2019年に作成した図であり、愛媛大学はこの図の具現化を目指しています。

愛媛県の出生数は、現在の学部1年生が生まれた2004年が12119人であったのに対し、2022年は7590人で、18年間で63%に減っています。この「縮小(していく)社会」の中では、ひとり1人の人間の大切さ、存在意義を大きくしていくことが求められ、そのためには、常に自らをアップデートするための「繰り返しの学び」が必要になります。そして、すべての人が生き甲斐を感じて働き、自分の人生が豊かであると感じられる。そのような社会の実現に、人類の英知を扱う集団である大学は貢献すべきと考えます。

これまでのように、「22歳で大学を卒業したら、人生での学びは終わり」という時代は、もうすぐ終わります。人生が長くなる一方で、産業構造の変化サイクルや企業の寿命は、短くなっています。大学は、これまでのように18歳から22、24歳までの学部・大学院教育にウエイトを置く体制から、40歳、50歳、60歳とさまざまな年齢で、複業、起業、地域活動を始める前に、大学で再度学んでもらえるような体制に変容しなければなりません。すなわち、「大学と社会との往還」です。

愛媛大学は、あらゆる年代の学びの希望に応えられるよう、大学の多機能化を図り、単なる「地域における知の拠点」ではなく、「全世代対応型の「地域における知の拠点」」として地域に貢献していきます。



これまでの主な実績 (『おぎゃーの図』の具現化を目指した取組例)

- ・ 2019年 「地域専門人材育成・リカレント教育支援センター」設置 (2020年度「教育研究組織整備概算要求」採択)
- ・ 2019年 「四国遍路・世界の巡礼研究センター」「俳句・書文化研究センター」設置
- ・ 2020年 「えひめ学生起業塾」発足
- ・ 2021年 地域ステークホルダーとの交流施設「E.U. Regional Commons」整備
- ・ 2022・2023年 大学院に「医農融合公衆衛生学環」「地域レジリエンス学環」を設置し、学びニーズの多様性に対応
- ・ 2023年 JST「次世代科学技術チャレンジプログラム「高校型」」採択
- ・ 2023年 文部科学省「成長分野における即戦力人材輩出に向けたリカレント教育推進事業」採択